

やさしい 囲碁史

天元打ちの歴史

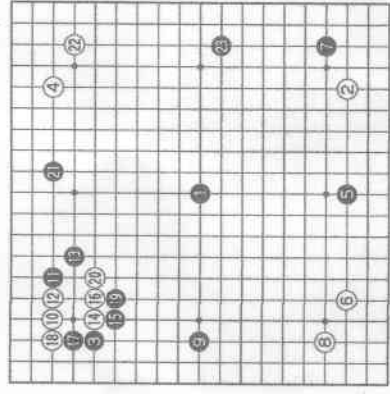
古作 登 (大阪商業大アミュージアムスメント産業研究所主任研究員)

碁盤の中心点である「天元」は万物の素や天子という意味を持ち、着点としても古くから注目されていた。

江戸時代の棋士、二世安井算哲 (1639~1715) が打った御城碁の棋譜 (下図) は有名で、相手は本因坊道策 (1645~1702)。家元安井家の長子として期待された算哲は最強のライバル道策に初手天元を用いたが及ばなかった。天文学や数学、暦法を学んでいた算哲は初の国産曆「貞享曆」(じょうきょうれき) を作って幕府の初代天文方を務め、囲碁界からは退き淡川春海と名を改めた。

明治維新により家元制度が崩壊したのち、明治、大正時代において天元打ちは注目されなかったが、木谷実 (1909~1975) と吳清源 (1914~2014) が1933 (昭和8) 年に「新布石」を発表、中央が重視されるようになり脚光を浴びる。同年、呉は本因坊秀哉 (1874~1940) との特別対局で初手三々、三手目星、五手目天元に打ち世間を沸かせた (白2目勝ち)。

初手天元打ちを得意とした棋士では関西の久保松勝喜代 (1894~1941) が有名。また、1950 (昭和25) 年に打たれた東西対抗戦の山部俊郎 (黒) - 橋本宇太郎戦では山部の初手天元に対し橋本はいきなりケイマにカカリ、布石から激しいねじり合いとなった。



1670 (寛文10) 年、算哲 (黒) と道策の御城碁 (1~23)。244手完、白9目勝ち。

第10回

碁碁書画の由来

古作 登 (大阪商業大アミュージアムスメント産業研究所主任研究員)

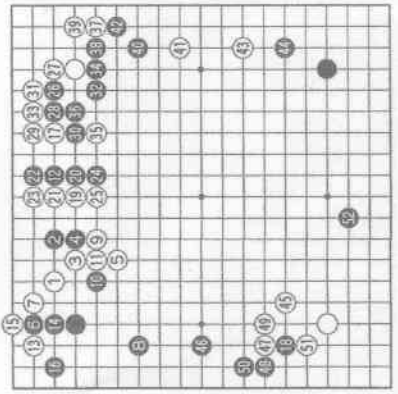
本誌連載のマンガ「棋士と暮らそう!!」にもたびたび登場した「碁碁書画」は四字熟語として有名だが、実は長い歴史を持っている。

四つの漢字はそれぞれ「碁」が音楽、「棋」が囲碁、「書」が書道、「画」が絵画を意味し、中国唐代 (7世紀~10世紀初頭) に使われるようになった。このころの中国は官僚を登用するための「科挙」と呼ばれる試験制度があり、難しい試験に合格すれば庶民でも上流階級への道が開けた。そうした支配層に推奨された技芸が「碁碁書画」であった。

唐の二代皇帝太宗 (598~649) は「書聖」王羲之 (303~361) の書を収集したが、どうしても手に入らなかった名品『蘭亭序』(詩集の序文の草稿) を得る際のエピソードを記したものが『蘭亭記』(何延之・著) で、この中に「碁碁書画」の表現が出てくる。

「碁」の文字はのちに「碁」や「棋」(いずれも碁碁のこと) と変化し現在に至る。

当時の碁碁は漢代から南北朝初期の17路盤から発展し現在と同じ19路盤ではあったが、盤上の星は五つ、隅の星に黒白たすき掛けに石を置いて開始する「事前置き石制」だった。また碁碁の名手から選ばれて皇帝の碁の相手をする役職も設けられるなど「碁」の評価は非常に高かった。



中国最古、唐代の棋譜と考えられている「金花梳図」の布石 (1~52)。名手同士の対局で白先。244手で黒1目勝ち。

第9回

やさしい 囲碁史